



守れるか「神の山」

Ⅱ 資源開発に揺さぶられるインド少数民族Ⅱ

時事通信社・ニューデリー支局特派員

柴田 裕介

「開発か」「環境か」――。使い古さ

れたような命題ではあるが、近年著しい経済成長を見せるインドでも、この二者択一は避けて通れない問題になりつつある。2010年度の実質国内総生産（GDP）成長率8・5%を見込み、安定した成長軌道に乗る同国では今、各地で企業による資源開発が進行。それに伴い、開発と表裏一体の自然破壊にどう向き合うべきかという議論も熱を帯びるようになっていいる。インドが出す答えはどのようなものなのか。環境と開発のはざままで揺さぶられる東部オ

リッサ州の一部族の例を報告する。

◇「神の山」で企業が開発計画

インド洋に面する東部オリッサ州の内陸部。ジャングルに囲まれたニヤムギリ丘陵に「コンド」という部族が暮らす。詳細は不明だが数百年前から定住したと言われ、「ドングリア・コンド」と「クティア・コンド」の2集団で現在の人口は約8000人。彼らの住む世界は文明とは隔絶していると考え、独自の文化を築き上げてきた。顔のあちこちに装飾品を付けるなど服装も特殊だ。

そんな彼らが神の住む場所とあが

める山で、英国ロンドンに本部がある資源開発会社「ベダンタ・リソーシズ」がアルミニウムの原料となる鉱石ボーキサイトの採掘を計画したことが、問題の始まりとなった。

ベダンタはインド、ザンビア、オーストラリアの3カ国に拠点を持ち、亜鉛や鉄鉱石、銅の採掘・精製を行っている。インド人実業家アニル・アガルワル氏が1976年に西部ムンバイに創業した会社が原点だ。以後、買収を繰り返し、今では従業員3万人、売上高79億ドルの大企業に成長、ロンドン市場のFTSE100銘柄



ニヤムギリ丘陵を背に、ベダンタに抗議して人間の鎖をつくるドングリア・コンド部族の人々。(写真／シッタールタ・ナヤク氏提供)

入りも果たしている。ロンドン在住のアガルワル氏は米誌フォーブスの資産家ランキングで世界113位の総資産は64億ドル(約5400億円)と見積もられている。

◆最高裁も「原則」承認

そのベダンタがオリッサ州政府との間で開発計画に関する覚書を結び、中央政府に開発のクリアランス(許可)を求めたのは2003年のことだった。計画は、州南西部のカラハンディ地区の約7平方キロの土地でボーキサイトを採掘、さらにボーキサイトをアルミニウムにして輸出するための精製所を建設するという内容だった。採掘予定場所に眠るボーキサイトの量は7300万トンで、ベダンタはこれを23年間毎年300万トンずつ採掘するとした。採掘場所となるニヤムギリ丘陵の上層部から精製所が位置するふもとまではベルトコンベヤーで結ばれる予定になっていた。

これに対し2004年、ベダンタの開発計画が環境保護に関する法律

などに違反しているとして、オリッサ州内外在住の個人から計3件の申し立てがオリッサ高裁と最高裁にされた。同年11月に最高裁が審理を開始、これを受けて諮問委員会が2005年から2年間かけて調査を行い、最高裁は2007年に開発計画を執行停止する暫定決定を行った。だが、その後、2008年8月に最高裁は地元コミュニティの持続発展や環境保護、動植物の保護などの条件を付加しながらも、開発計画を認める最終決定を下した。中央政府も同年12月、最高裁の決定を受けて開発計画を「原則」許可した。

ただ、既に2004年9月の段階で中央政府は資源採掘の可否を棚上げしたまま、精製所の開発については認める決定を下していたことから、ベダンタは2006年に精製所の建

設を完了。2007年には他の州で採掘したボーキサイトを運び入れ、精製作業に着手している。

◇調査委が事実上の中止勧告

しかし、今年に入り、環境省が現場調査を行った結果、法律に違反する点があることが判明。急きよ、全国諮問会議（NAC）のサクセーナ氏らで構成する特別委員会を立ち上げて精密調査することが決まった。

サクセーナ委員会は8月、約120ページからなる調査報告書を政府に提出した。同委はこの中で、ベダンタの開発予定地はコンド部族にとつては「聖なる土地」であり、彼らの生活のよりどころとなっている場所だと指摘。その上で、①採掘がニヤムギリ丘陵の生態系を著しく傷つける見通しであること ②ベダンタが約26ヘクタールを柵で囲い込み、

地元住民を排除するなど数々の違法行為が確認されたこと——などを挙げ、「会社（ベダンタ）が数々の違法行為を行ったことにかんがみれば、部族に犠牲を払わせてまで、会社にこれ以上、この土地へのアクセスを与えることは国の安全や国民の安心に極めて重大な結果をもたらす」と結論付けた。報告書は明言を避けているが、これは開発中止を要請したのと同じ意ととらえてよいだろう。

サクセーナ報告を受けて制作された森林諮問会議（FAC）の勧告に基づき、インド環境省は同月、オリッサ州でのベダンタによるボーキサイト採掘計画を認めないとの決定を下した。ラメシユ環境相は「環境保護法など複数の法律の違反が確認された」と理由を述べた。

ところが、環境省の決定に対し、オ

リッサ州政府は反対を表明した。州政府トップの州首相は中央政府の与党とは別の政党で、反対の背景にはインド各州との競争上、開発に取り残されたくないとの思惑があると指摘されている。インド紙ヒンドゥーによれば、オリッサ州政府高官はラメシユ環境相に対し、開発計画を認めた2008年の最高裁判決が「事実上の最終決定として既成事実化している」と主張。しかし、環境相は「既成事実を基にわれわれが判断することとはできない」とし、最高裁判決があつても環境相が自由に決定を下せるとの政府側の法律見解を示した。

実は、インド最大の財閥タタ・グループもオリッサ州の別の地域で鉄鉱石採掘を実施しているが、こちらは部族との間で合意がなされている。地元専門家は「タタは金を掛けて貧

しい部族への援助を行っている。開発は単に『金儲け』のためではない」と指摘した。金に物を言わせたと言え、それまでだが、タタは部族の人々の気持ちをよく研究していたと考えることもできるだろう。

◆部族側は徹底抗戦の構え

8月の環境相の決定は、インド政府が今後、開発と環境の二者択一を迫られた際、方針を決定するための一つの指標になるかもしれない。それほど重要な決断をしたと言える。

しかし、政府から「ノー」を突きつけられたベダンタだが、採掘計画を完全に取りやめたわけではない。地元紙によると、同社は州政府に対し、採掘可能な新しい土地を確保するように要請したとされる。そのため、ベダンタに対する部族の怒りは収まるところか、むしろ膨張した格好だ。

「ベダンタは『ならずもの会社』だ。われわれのすべてを奪い取ろうとしている」。クティア・コンドのマジヒ氏は取材にこう声を荒らげた。「ベダンタはわれわれの体をブルドーザーや機械で削り取ればいい。こちららは反対を貫く」と、徹底抗戦の構えだ。

部族学専門の元大学教授で、現在は上院議員を務めるラム・ダヤル・ムンダ氏は「コンド部族はインドでも最も原始的な部族だが、既に絶滅の危機に瀕している」と警鐘を鳴らす。同教授によれば、国内にはベダンタのような資源開発で故郷を追われ、別の地域で路上生活を送る部族が2000万人いる。彼らは「政府の再定住策もなく、放置された状態だ」という。

1969年に設立され、世界各地の部族の保護運動に取り組んでいる

英団体「サバイバル・インターナショナル」によれば、コンド部族は自分たちを「川の守護者たち」を意味する「ジャルニア」と呼ぶ。深い森を貫き、人々の生命を育んできた母なる川を守りながら暮らしてきたからだ。

「もし部族が自分の意思に反して採掘などの産業プロジェクトを強制された場合、彼らはほとんど絶滅する運命になる」――。同団体のリンジー・ダフィールド氏は取材に対し、ベダンタの採掘計画に反対する理由についてこう述べた。コンド部族の誰も採掘を支持しておらず、それが部族を支援する理由だ、と。「もし部族が自分の土地を管理することが許されれば、その部族は生存が可能になる。そうすれば自分の生活を自分で賄い、未来に責任を持つことができる」と訴えた。（しばたゆうすけ）